

に氣をつけるのが大切です。

此病の發作は夜にあるのが多いです。故に晝は少しも變らず遊び、從て大人もさほど心配せず夜になりますが、發病するのですからよく氣をつけなければなりません。

昔いろは料理

石井泰次郎

(た) こんど 今度の四の仕方は昔の仕方を記せる物なり

たけのこの汁搾へかた

竹の子の根と、穂先とを切て、皮をむきざり、切方は好み次第小さくも大きくとも小口切にも、は

す切にもして、ざつと油にていため、蕗と焼豆腐とはじき豆などあしらひて、汁にも仕立、又すひ

ものにも仕立るなり、吸口 木のめ。

田にし用ひかた

田螺は、あらひて、煮しめて用ふ、又干大根などつけあはせて、木の目あへにしてよし。

た、みいはし用ひかた

た、みいはしとは、白すといふ魚のはしたるにて、醤油をふりかけて、あみの上にてやきて用ふべし、又た、みいはしを水に二日ほどつけおけば生の色にもどり、ひとつひとつはなる、なり、是を白魚の代に獨活など入て吸物にして用ふべし。

吸口、淺草のりを揉てふりれくなり。

たいのかきはり搾へかた

鍋に鹽をやきつけれき、鯛をうすく切身にして入るべし、さて味淋にても酒にてもひた／＼に入れて煮るべし、さて酒氣ののきたる時に、米のとぎ水

の三ばんとぎの白水を入れ鹽梅して出すなり、是は鹽の加減を以て肝要とすべし。

頃此本の續きに女教師が三四人の男児と鬼ごとを爲し、一人が手を拍ち居る繪ありしを見せたる事あり、其れ思ひ出せしならん。

小さき日記 (明治三十三年七月生男子)

(承前) 印東音鳴

明治卅四年一月二十二日。雪の中に兵士の通るを

見(ブッブッブ)と踏り上りて喜ぶ。

れ菓子(みかん)にも密柑(みかん)にて他所より貴うて歸へれば

必ず姉さんに一ツあげる、一ツよりなき時も半分(はんぶん)ふあげと言へば(ボーン)と云ひ割てくれとて出す。

二十五日。姉さん(オッカア)と教へしに(オッカア)と云ふ、皆々大笑ひ。

女學(じょがく)世界(かいせき)に束髪(しゆぱつ)に結ひたる娘の、小さき男兒(をどこのこと)の手

を引ひてゆく圖(ず)あり、是を見て拍手(はいしゅ)をなし母(はは)にも

せよとて母(はは)の手を取る、何故(なぜ)ならんと考へしに先(さき)

陶器(とうき)の大(おお)を持ち來り(アカボンボアブ)と云ふ。

二十六日。(あい)と初めて返辭(へんじ)の言葉(ごんば)を云ふ。

毎朝(まいぢょう)早くより眼(まなこ)をさまし(パー・バオン・マヒン)と云ふ。

母(はは)かき餅(きもち)を切り居(ゐ)しに、側(そば)に來(き)り三(さん)ツ四(よん)ツ縁側(えんがわ)に持ち出し(アカム)と呼び投(なげ)け出す。

夜(よる)ふとんを敷(ひ)くを見れば直(ただ)ち(ち)に(ゴー・オクンナー)と云ふ。

二十七日。鶏(けい)に菜(な)をやるを見てコーコ(香物のと)と云ふ。

四五日前(にちまへん)よりデー(と云ひ出)す、爺(じい)や(を呼)ぶ積(づ)りなり。